

目次

- 2頁 理事長年頭のごあいさつ
- 3頁 KITAの取り組み重点テーマ“CP”
- 4頁 最近終了した研修コースの話題
- 6頁 最近6カ月間に終了した研修コース一覧
- 7頁 海外での活動状況
 - アルゼンチン、インドネシア、ロシア、ベトナム、韓国
- 10頁 北九州メンテナンス技術研究会 (KME) の活動報告
- 11頁 KITAの国際親善交流
- 12頁 TOPICS



エコテク/2009 ～地球環境・新エネルギー技術展&セミナー～ に初出展

「エコテク/2009」が、昨年10月21～23日に北九州市の西日本総合展示場で開催され、KITAは初めて出展しました。

KITAブースには、小学生から環境専門家まで多くの方々を訪れました。(詳細は本文(2頁)参照)



“人は城、人は石垣、・・・”

(財)北九州国際技術協力協会
理事長

河野 拓夫

新年あけましておめでとうございます。

皆様には穏やかで希望に満ちた新春を迎えられたこととお慶び申し上げます。本年も皆様のご健勝とご多幸をお祈りいたします。

私どもKITAは、今年も創立の精神である人材育成を通じた国際貢献をさらに発展させたいと念じています。

武田信玄の『甲陽軍鑑』に“人は城、人は石垣、・・・”という言葉があります。戦国時代、各国大名が競って堅固な城郭を築くことに精を出していた頃、信玄は人材に着目し、その育成に力を入れ、風林火山の旗印のもと、武田二十四将を育て戦国最強の騎馬軍団を編成しました。その結果、急速な版図拡大に成功し一代で八カ国を領有する大名となりました。

人材育成では、中世から僧侶が子弟の教育に力を入れてきましたが、江戸時代に入って“読み書きそろばん”を教える寺子屋が広まり、職業の多様化に応じて地理、人名、書簡の作成法など実生活に必要な知識や技術の教育が広く行われました。その結果、全国的に庶民の学力向上はめざましく当時の識字率は80%に達したと言われています。

幕末になると、西洋文化・技術の導入が活発となり、九州・山口においても近代産業が急速に発展しました。これら一連の近代化産業遺産群を世

界遺産に申請するため推進協議会が結成され、先日シンポジウムが開かれました。その席上、専門家委員会委員長のニール・コソン卿(英国国立歴史遺産協会*前総裁)は、現地を視察した後「このような他国に例を見ない速さでの発展は、江戸時代に寺子屋などで庶民の教育が盛んに行われていたことが大きな原動力となっている」と感想を述べています。

現在、JICAは世界の平和と貧困の撲滅を目指し、ODA(政府開発援助)として発展途上国の開発に力を入れています。KITAはその一端を担って活動していますが、途上国から来た研修員に接して感じることは、彼らはインフラなど設備投資(ハード)だけでなく、それを効率的に維持・操業する技術(ソフト)も学びたいと強く望んでいることです。

KITAは今年30周年を迎えますが、創立以来一貫して発展途上国の人材育成に力を尽してきました。人材育成は短期間で効果が見えてくるものではありませんが、長い目で見れば確かに実り多いものです。「人こそ全ての原点である」との想いを今後も強く持ちつつ着実に努力を続けていきたいと考えています。

本年も皆様のかかわりご指導ご鞭撻をお願いして新年のご挨拶といたします。

*英国国立歴史遺産協会：イングリッシュ・ヘリテイジ(English Heritage)

NEWS&TOPICS

『エコテクノ2009 ～地球環境・新エネルギー技術展&セミナー～ に初出展』

KITA環境協力センター 村上 能崇

西 日本地域で最大規模の、低炭素社会に向けてアジアとつながる見本市「エコテクノ2009」(10月21～23日、西日本総合展示場開催、北九州市・(財)西日本産業貿易コンベンション協会主催)にKITAは初めて出展しました。

KITAのめざすもの、業務概要、受入研修の実績、北九州メンテナンス技術研究会(KME)、ロシア・チェリャビンスクとのビジネスマッチングと技術移転についてパネル紹介し、来場者にご覧いただきました。また、最終日には北九州市内の小学4年生約50名に対し、

半世紀前に北九州市の公害を克服した技術を海外に技術協力移転した話や海外研修員の受入やKITA専門家の派遣について説明しました。企業関係者をはじめ多くの方にKITAを知ってもらえました。

今後も持続的な発展のための産業開発と環境保全の調和をめざした国際技術協力の推進に努めてまいります。



エコテクノ2009会場風景

『製造業から見たクリーナープロダクション(CP)』

KITA生産性協力センター所長 藤本 研一

1989年開催された国連環境計画理事会でクリーナープロダクション(CP)の概念が提案されました。CPは経済面、環境面での合理性を追求するため、製品設計・設備設計・生産計画・生産段階など全ての工程に創意工夫を加え、「生産合理化」と「環境改善」を同時に追求する考え方です。

人類は現在、3つの課題に直面しています。つまり、経済成長に伴う「資源枯渇(化石燃料、金属資源)」、「環境問題(公害、地球規模の環境問題)」および発展途上国を中心とした「人口増加」です。これらの課題に配慮しつつ経済発展するためには、CPは非常に有効な考え方です。

CPは特別な技術や手法ではなく、「考え方」です。日本では「CP」という「言葉」は必ずしも流布していませんが、過去、日本の製造業は類似の考え方で「コストダウン」、「品質改善」、「環境改善」に努力し、世界に冠たる製造業を確立しました。日本の製造業は図-2のような色々な手法で競争力を高めてきました。代表的な活動の一つに、「全員参加型生産保全(TPM:Total

Productive Maintenance)」があります。この活動は生産システムの効率化を極限まで追求する活動ですが、実行過程で環境改善も当然考慮しなければなりません。また、ISO14000シリーズは環境影響を持続的に改善する仕組みですが、経済合理性のある対策を行うことが必須です。企業が実施している各種の活動は重点の置き方、規模は違いますが、「生産合理化」と「環境改善」を同時に狙うことであり、CP類似の考え方です。

北九州市の鉄鋼業から排出された硫酸化物量は1970年、約2.7万トンであったのに対し、1990年には約6百トンまで激減しました。対策としては省エネ、エネルギー転換などのCP的対策の寄与率が75%に達しています(北九州市のパンフレットによる)。このように、国連からCPが発表される以前から、日本の製造業はCP的手法を実行していました。CPは図-2に示したような、各種の手法、技術を通じて実行されます。つまり、CPを達成するためには色々な登山道があります。どの登山道を選択するかは課題次第です。

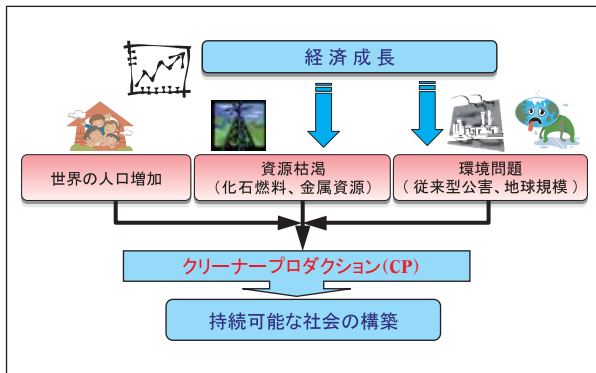


図-1 人類が直面している3つの課題

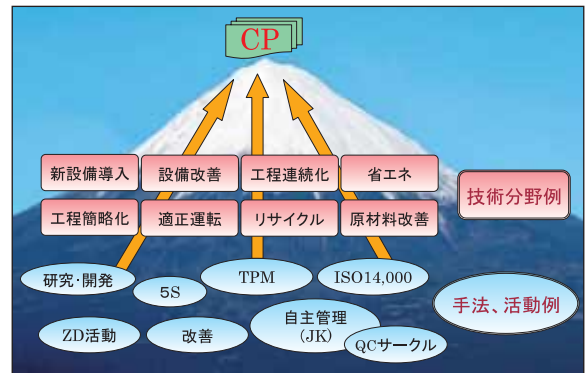


図-2 CPの概念図

『アジア地域の低炭素化に貢献する北九州の技術』

技術協力部 田中 伸昌

北九州市は、2008年7月に環境モデル都市に認定され、低炭素社会をつくるための活動を行っています。市が計画しているアジア低炭素化センター設立もその一環です。低炭素化の推進というと、省エネルギー、新エネルギーへの転換などをイメージしやすいのですが、もっと多面的な要素を持っており、上の記事にあるCPの考え方を導入し実践することが肝要です。生産性向上や品質および歩留りの向上を操業改善や小さな設備改善により達成することが大切です。また、コストダウンにつながる長寿命や作業性を改善する部品や資材への変更も有効です。

これらはいずれも省エネルギー、省資源ひいては低炭素化の推進に役立つこととなります。そしてそれぞれが、北九州の多くの企業が最も得意とする分野であり、アジア諸国にとっても受け入れやすいものと思われます。北九州市の支援体制も整いつつあることは、心強いばかりです。

皆さん! 現場が本当に望んでいるものを研修受け入れ時に、また現地でのヒアリングにより把握し、北九州の持つ技術商品を適切な形で普及するように努めようではありませんか。

『新設研修コース「メルコスール地域 省エネルギー技術」を開講して』

KITAコースリーダー 川口 健二 KITAコースリーダー 植山 高次

メルコスール*4カ国は、それぞれ国情は異なりますが、近年の経済発展に伴うエネルギー消費増大、国際的な原油価格高騰やその他の燃料の不足などを背景に、地域として一体となり省エネルギーに取り組み始めています。しかし、行政・技術面での専門家不足がネックとなり、効果的な対策を立てるまでには至っていないようです。

そこで、本コースはメルコスール各国でエネルギー効率化政策の企画立案を担う中堅技術系スタッフの計画策定能力向上を目的に、日本の国や地方の行政機関での講義や省エネ技術・省エネ事例紹介を中心に、昨年10月5日より3週間実施されました。

9名の研修員は、それぞれの課題を明確にして研修に参加しました。とくに、日本の省エネルギー政策やその推進の仕組みなどに強い関心を持って参加しており、資源エネルギー庁を始めとする行政機関での講義は非常に好評でした。

ブラジル・リオデジャネイロでの南米初のオリンピック開催が決まった直後でもありましたが、南米のイメージ通り陽気な、しかも礼儀正しい研修員が大変熱心に講義や企業研修に取り組んでいました。また、講師へ質問する姿にはこれから国をリードして行こうという気概と

自信が感じられました。帰国後はこの研修の成果を活かして、現状の壁を打破してくれることを確信致しました。

次回は1年後の開講予定ですが、今回の経験を踏まえて一層充実したコースにしたいと考えています。関係者各位のご支援、ご協力をよろしくお願い致します。

*メルコスール：Mercosur、アルゼンチン、ブラジル、パラグアイ、ウルグアイの4カ国で構成された、財、サービス、生産要素の自由な流通をめざす南米南部共同市場



(株)山武での「ビルの省エネ研修」を終えて



資源エネルギー庁での講義を終えて

『新設研修コース「中南米地域 生産性向上活動普及(ボランティア連携)」を開講して』

KITAコースリーダー 河崎 克彦

本コースは、南米地域、カリブ海周辺地域の製造業のカイゼン、5Sなどの生産性向上活動の裾野人材を育成するための講座で、生産性向上活動に従事している方々が対象です。また、現地で生産性向上活動を行っているシニアボランティアへのサポート力を強化する研修でもあります。これら地域の生産性向上活動には地域差があることから、活動活発な(A)南米地域と、活動が始まったばかりの(B)カリブ海周辺国向けの2つのコースに分け、昨年6月上旬、8月下旬にそれぞれ約2カ月間実施しました。(A)コースには、チリ、コロンビア、エクアドルからの4人が参加し、(B)コースにはキューバ、ドミニカ、グアテマラ、ニカラグアからの7人が参加しました。

各コースの研修内容は生産管理、生産技術、品質管理が中心です。当初は、カリブ海周辺国の産業事情がよく分からなかったため、研修方法に少し危惧しましたが、全員とも産業知識も豊富で順調に進めることができました。また、皆たいへん元気で、カリブ海周辺国は特に陽気で時々脱線することもありましたが、楽しく研修することができました。また、企業研修では中小企業、

大手企業を訪問し、日本における5S活動を始めたとした自主改善活動、情報のオープン化、トップとワーカーのコミュニケーション、一体化、さらにはワーカーのレベルの高さに感心していました。

日本とのカルチャーの違いもあり、日本で習得した現場の生産性向上活動を帰国後どこまで活かせるかが気になりますが、個人レベルではなかなか難しいと思われる。そこで、JICA現地事務所と現地の経済団体のもとに生産性向上機関を立ち上げ、そこを中心に継続的な生産性向上活動が必須と思われる。

また、次年度は今回の経験を踏まえ一層充実したコースにしていきたいと考えています。



(株)安川電機の本社での研修を終えて

『福岡県国際環境人材育成研修「アジア循環社会創造コース」に携わって』

KITAコースリーダー 吉田 隆造 KITAコースリーダー 田嶋 澄夫

アジア地域が大きく発展している現在、今後とも健全な発展を続けていくためには環境問題対策が不可欠であり、福岡県はこれまで培ってきた県の経験や環境政策などの蓄積を活かし、アジア諸国との環境人材のネットワーク構築を目指しています。そこで、アジア諸国で環境施策を担っている中核の行政官を招聘して、環境人材育成研修を2006年度から実施しています。2009年度は、福岡県が友好関係を持っている①中国、②ASEAN・インド地域を対象に昨年8月下旬、11月中旬にそれぞれ約1カ月間実施し、それぞれ7名、8名が参加しました。

研修の特長は、一方的な講義や視察形式ではなく、福岡県の環境リソースを活用しながら、研修員の国の抱えている問題を如何にして解決していくか、研修員とともに考え議論していくという双方向コミュニケーションです。行政官という立場からか、福岡県や北九州市の現状の取り組みのみならず、そこに至るまでの行政の失敗談や住民説得の苦労話なども問題解決の手がかりとして興味があるようでした。

筆者吉田は、昨年初めて本研修に携わり、改めて福岡県の環境リソースの充実振りや産学官民の連携の良

さを実感しています。各国研修員と出会い、議論を交わす研修は、関係各国とのネットワークを構築するためのスタートだと考えています。相互の信頼なくして交流はあり得ないので、信頼構築・醸成の意味からも研修の持つ意義は極めて大きいと感じています。今後も継続的に研修員と連絡を取り合いながら、人材ネットワークの輪を拡げ、福岡県とアジア地域の環境改善への連携が強まっていくことを願っています。



福岡県庁での研修「県環境行政」を終えて

『「第6回昆明市水環境改善研修」に携わって』

KITAコースリーダー 鶴田 三郎

昆明市は、滇池*の水環境改善のため下水道整備事業をJBIC**の円借款事業である「昆明市水環境改善事業」の一環として実施しています。

昆明市の下水道事業の人材育成を目的とした本研修は、昆明市からKITAが研修を受託し、8回に分け総勢90名の研修生を受け入れる計画です。2007年3月から開始し、今回6回目の研修を昨年10月26日から11月7日まで実施しました。

研修には、昆明滇池投資有限責任会社の徐 増雄社長を団長とし、昆明市企画局から1名、昆明市滇池北岸水環境総合改善工程建設管理局から4名の計6名が参加しました。

今回の研修は、管理者を対象とし、上下水道事業の運営管理が主テーマです。まず、北九州市の上下水処理場、ポンプ場と管渠の建設現場を視察しました。また、北九州市立水環境館と同環境ミュージアムを視察し、水環境改善を図るためには、市民への環境教育が重要であることを認識しました。その後、日本の先進的な下水処理場である東京都有明水再生センターにおいて高度処理技術や中水利用等を研修し、横浜市北部污泥資源化センターと横浜改良土センター(株)において汚

泥のガス化と焼却灰のリサイクルを研修しました。また、昆明市滇池の水環境改善の参考とするため、滋賀県琵琶湖再生課及び琵琶湖環境科学研究センターにおいて、琵琶湖の水環境保全について学びました。

本研修が研修員の業務に役立ち、昆明市の水環境改善に寄与することを期待しています。

*滇池(デンチ):昆明市にある中国第6の淡水湖で、面積は琵琶湖の約半分

**JBIC: Japan Bank for International Cooperation



東京都有明水再生センターでの「污泥槽の採水設備・技術」研修風景

『鹿児島県志布志市における“固形廃棄物ワークショップ”研修で学んだこと』

KITAコースリーダー 川合 玄夫

昨年6月、大洋州島嶼国を対象とした掲題ワークショップの一部として鹿児島県志布志市で学習する機会がありました。志布志市訪問に際し、市のスタッフはじめ市長、市議会役員、教育委員会スタッフなど要職にある方々が歓迎の夕食会を開いてくださり、感謝しています。

同市の廃棄物管理には多くの特長があります。主な点は、廃棄物ごみを1998年から2005年までの7年間で80%減量したこと、廃棄物用焼却炉を持たないこと、さらに、埋立地の容量に十分余裕があることなどです。ごみの分別収集方法では、一般廃棄物だけで28種に細分化されています。ごみ埋立地については、これまで約20年間使い続けて来ており、当初予定されていた使用可能年数を大幅に伸ばし、これからさらに数十年使える見通しです。埋立地の特長は悪臭が無く、また浸出水の処理に特別な設備が無いことです。悪臭の元になる台所ごみはすべてコンポスト化されています。同市の廃棄物処理で成功した理由は、市の関係者と市

民の良好な信頼関係があることです。これは市のスタッフの努力の賜物と思います。同市がスローガンに掲げている“物を大切に、人を大切に”を着実に進めていることが実証されています。

同市訪問で得た知見は、KITAの一つの財産となりました。また、KITAとは九州の北と南という地理的ハンディキャップはありますが、同市を訪問して得られる知見は計り知れないものがあり、今後他の研修コースでも活用して欲しいと思います。



志布志市のごみ収集現場

最近6カ月間 (2009年7月～12月) に終了した研修コース 2009年12月末 合計236名

研修コース
凡 例JICA
集团研修JICA
地域別研修JICA
国別研修KITA
個別研修

	研修コース名	受託先機関など	KITAコースリーダー/ (アシスタントコースリーダー)	KITA研修期間(月/日)	研修人数
環境対策	産業廃水処理技術Ⅱ	JICA	荒川	7/31～11/26	7
	生活排水対策	JICA	米澤	9/ 3～12/11	7
	南西アジア地域・廃棄物管理	JICA	原口	10/13～11/26	9
	南東欧地域・クリーナー プロダクション振興	JICA	西野	10/16～11/21	7
	KOICA-JICA 大気環境保全管理	JICA	西野	9/ 7～ 9/18	16
	KOICA-JICA 東アジア環境・省エネルギー政策と技術	JICA	川合	10/19～10/29	10
	廃棄物管理技術と環境教育 (A)	JICA	指輪/(城戸)	6/30～ 9/10	6
	大気汚染源管理	JICA	貴戸	10/20～12/18	5
	アルゼンチン プエノスアイレス州・固形廃棄物減量化計画	JICA	川崎	9/22～10/ 2	3
	マレーシア・廃棄物管理	JICA	南	10/ 5～10/20	9
	フィジー国・3R促進	JICA	川合	11/16～11/27	5
	韓国・環境・省エネ専門セミナー	(財)日韓産業技術協力財団	石井	11/15～11/20	10
生産技術、 設備保全	設備管理における生産性向上と省エネのためのクリーナー プロダクション (A)	JICA	石川/(尾野)	8/17～11/27	5
	中南米地域・プロセス工業におけるクリーナー プロダクション (A)	JICA	安部/(福森)	8/17～11/20	6
	メルコスール地域・省エネルギー技術	JICA	川口/(植山)	10/ 5～10/23	9
	中南米地域・生産性向上活動普及 (ボランティア連携) (A)	JICA	河崎	6/ 8～ 7/24	4
	中南米地域・生産性向上活動普及 (ボランティア連携) (B)	JICA	河崎	8/31～10/21	7
	アルゼンチン・製鉄業におけるCP (第2陣)	JICA	上野/(久保)	6/ 8～ 7/28	4
	インド・省エネルギー技術 (A)	JICA	植山/(川口)	7/13～ 8/ 7	15
	インド・省エネルギー技術 (B)	JICA	田中/(植山)	8/24～ 9/18	14
韓国・中小企業クリーナー プロダクションセミナー	韓国知識経済部	和田	11/26～11/28	26	
循環型社会推進	アジア循環社会創造 (ASEAN・インド) (県)	(財)福岡県環境保全公社	田嶋/(吉田)	11/17～12/16	8
	アジア循環社会創造 (中国) (県)	(財)福岡県環境保全公社	田嶋/(吉田)	8/25～ 9/17	7
職業訓練、 地域活性化	持続可能な発展のための職業環境保健マネジメント	JICA	高橋	8/17～12/ 4	8
	南米地域・中小企業地場産業活性化研修	JICA	三木	8/ 5～ 8/28	8
	南米地域・中小企業地場産業活性化 (A)	JICA	三木	9/ 2～ 9/29	8
	労働災害防止活動強化	JICA	植山	11/12～12/17	6
アジアの環境人材 育成	中国・昆明市 水環境改善研修	中国昆明市	鶴田	10/26～11/ 7	6
	自治体職員協力交流事業研修 [CLAIR研修 (環境保全)]	北九州市	村上	6/25～12/10	1

●なお、研修コースの詳細、年間スケジュールはKITAのホームページ (<http://www.kita.or.jp/>) でもご覧になれます。

『アルゼンチン製鉄業におけるCP活動支援のため現地へ』

KITAコースリーダー 上野 正勝

アルゼンチンの鉄鋼生産量は日本の3～5%程度ですが、クリーナープロダクション（CP）の導入には非常に積極的です。その推進の中核がアルゼンチン鉄鋼協会（IAS）で、このIASの活動を支援するためJICA/KITAとIASがチームを作ってプロジェクトを推進しています。プロジェクトは、①IASを主体とした研修生の受け入れと②現地での活動支援で、筆者はこの後者の仕事のため11月上旬に2週間アルゼンチンを訪問しました。

最初の仕事はIASが開催するセミナーにおいて、CPに関する基調講演です。このセミナーには世界17カ国からの参加があり、CP分野（JICAが共催者となり、今回初めて開催）のほかに製銃分野（第7回）、製鋼分野（第17回）の講演もありました。CP分野はセミナー最終日にもかかわらず大勢の出席者があり、アルゼンチン製鉄業におけるCPへの関心の高さが伝わってきました。講演の後、IASと共にアルゼンチンの主な鉄鋼会社を訪問して工場見学とCPに関する意見交換をさせていただきました。さらにJICA現地事務所とともに環境・持続的開発庁も訪問し我々の活動を紹介しました。

今回の訪問はIASとの連携強化はもちろん、アルゼンチン製鉄業界にCPの重要性を普及させる上においても非常に有意義であったと思います。このプロジェクトは2010年度まで継続される予定です。



セミナーにおいてCPに関する基調講演中の筆者



Sipar Gerdau製鉄所でのミーティング風景

『インドネシア・スマラン市 住民に対する廃棄物収集システムの構築』

KITA環境協力センター 山家 小百合

KITAは「国際ボランティア貯金」の寄附金の配分を受けて、2008年度よりインドネシア・スマラン市において、廃棄物の適正管理を目的として、生ゴミの堆肥化及び資源ゴミの分別の推進による、コミュニティの廃棄物管理システムの改善を行っています。

2008年度は、ゴミの投棄が大きな問題となっている同市ジョンブラン地区のモデルコミュニティ2カ所において、現地NGOであるBINTARI財団と協働してジョンブラン地区の活動を支援しました。環境意識の向上を図り、モデルコミュニティに活動を普及させるための環境指導者研修会の実施です。研修を受講した住民が中心となり、住民自ら環境保全活動のためのグループを結成し、住民主体の生ゴミの堆肥化と資源ゴミの分別収集活動による廃棄物の減量化に取り組み、現在も継続活動中です。

2009年度も引き続き、同市ツグレジョ地区のモデルコミュニティにおいて、同様の研修を実施し、活動を開始しました。活動を円滑に行うために、地区長、住民組織等を中心とした廃棄物管理組織を結成し、サポートする体制を作っています。

環境やゴミ問題に関心が低かった住民も活動に参加

することにより、環境意識が目に見えて変わってきました。コミュニティにおいて環境啓発活動も行っています。この活動がスマラン市全体に普及・拡大し、環境改善に役立つことを期待しています。



堆肥化に取り組む住民



環境指導者研修会風景

『ロシアとの技術交流促進 ～昨秋、北九州の企業がロシア訪問～』

技術協力部長 工藤 和也

2006年3月KITAが、社団法人ロシアNIS貿易会（ROTOBO*）主導の北九州企業とロシア企業の貿易促進支援事業に参加して4年弱になります。

昨秋には、三島光産（株）、（株）フジコーの両社を対象に、ウラル地方の鉄鋼の街でロシア第3の都市エカテリンブルグにあるマシプロム社（ロシアの鉄鋼関連エンジニアリング会社）を訪問し、製鉄所の訪問と技術討議を行いました。このロシア訪問に先行して、昨年6月には、マシプロム社から社長以下2名の幹部が北九州市に来訪し、両社の工場を見学し、技術討議を行いました。上述のロシア訪問では、マシプロム社主催の鉄鋼関連セミナーが開かれ、9月には三島光産（株）、10月には（株）フジコーから技術紹介を行い、KITA工藤は日本鉄鋼業の省エネルギー、省資源の変遷を講演しました。セミナーには鉄鋼関連技術者のほかに、大学からも教授など専門家が集まり総勢60名を超え盛況でした。質疑応答もかなり突っ込んだ専門的なものが多く日本の技術に注目が集まりました。

ロシア鉄鋼業は一昨年の金融危機の影響を受けて深刻な状況に陥っていましたが、最近はかなりの勢いで回復しつつあります。ロシア鉄鋼業の最重要課題は収益改善のための設備の近代化とコスト切り下げです。これらの課題に呼応した今回の主要テーマである連続鋳造用モールドと圧延ロールの寿命延長技術は、ロシ

アのニーズに合致するものでした。

今回のロシア訪問によって具体的な技術移転が進む可能性もあり、実りある企業支援となりました。

*ROTOBO：Japan Association for Trade with Russian & NIS、ロシア及び東欧への貿易振興のための経済産業省の外郭団体



デジタル製鉄所を訪問
世界で2番目に古いコークス
使用の溶鉱炉の前で



マシプロム社主催の
鉄鋼関連セミナーでの
パネルディスカッション

『インドネシア 市民参加型廃棄物管理事業に携わって』

KITA環境協力センター 永石 昌也

家庭用生ごみコンポストを核として家庭ごみの分別・リサイクルを推進する「市民参加型廃棄物管理事業」は、KITA・北九州市の協力のもとに、インドネシア・スラバヤ市では、3年間でごみ処理量10%削減という大きな成功を収めています。

一方、同国他都市では、ごみの衛生管理、河川や道路などの散乱ごみ、最終処分場の容量の逼迫などが問題視されており、スラバヤ市の成功例に大きな関心を寄せています。

昨年8月に（財）地球環境戦略研究機関（IGES）が、スラバヤ市で開催した北九州イニシアティブ会議に参加した同国の5都市（マカッサル市、パレンバン市、中央ジャカルタ市、バリクパパン市、タラカン市）から、同市の成功事例に学び自らの市でも、ごみの減量化に取り組みたいとの声が上がりました。

KITAは、北九州市、IGESと共同でこの成功事例を先の5都市に移転し、5都市の廃棄物管理能力の向上とともに、インドネシア全国に普及させる仕組みづくり

を行う本事業を、JICA支援のもと実施することとなりました。

11月4、5日に、上記5都市の行政関係者・市民団体、政府機関関係者（環境省、公共事業省）がスラバヤ市に集まり、その取り組み普及を目的とするセミナー・スタディーツアーが開催されました。講師として（株）ジェイパック若松環境研究所より、高倉所長代理に講師として参加していただき、コンポスト技術の講義と実演をしていただき大変な盛況でした。今後の5都市での事業展開に大きなはみがついたものと思われま



スラバヤ市で開催されたセミナーの様子

『「ベトナム・ハイフォン市での環境啓発住民セミナー」を開催して』

KITA環境協力センター 串田 志津男

KITAは、昨年7月9日、(独)地球再生保全機構の地球環境基金の助成事業として、ベトナム・ハイフォン市ズンキン区の地域住民を対象に環境啓発セミナーを開催しました。

ズンキン区はもともと米作を主にした農村地域でしたが、最近の都市化や産業開発の影響を受け、ハイフォン市の工業団地として開発が進み、環境が急速に悪化している地域のひとつです。出席者はズンキン区住民50人、ハイフォン市関係者(天然資源環境局、外務局ほか)15人でした。

KITAからは「北九州市の公害克服の経験」と題し啓発ビデオ「Dokai Bay (洞海湾)」なども用い、産業公害の状況や行政・企業・住民の取り組みについて講演しました。また「水質汚濁、土壌汚染の影響について」と題し、水質汚濁および土壌汚染の原因と影響について説明し、汚染された後からの対策は資金も時間もかかるので北九州市の経験を繰り返さないよう事前の対策が必要であること、また厳しすぎる基準は守れない

ので、守れる程度の基準を設定し、監視や罰則は厳しくすべきであることなどを講演し出席者の大きな関心を呼びました。

ハイフォン市側からは「ハイフォン市の環境の現状」、「ズンキン区の課題」、「廃棄物処理業者からの現状報告」と題した講演が行われ、セミナー終了後には出席者との活発な質疑、応答がありました。

このセミナーを通じて、行政官・企業の経営者・地域住民の環境に対する共通認識が醸成され、ズンキン区の環境改善活動の出発点になったものと思っています。



セミナー会場となった風ビル(通称)

『韓国・釜山広域市 地域エコイノベーション事業に携わって』

技術協力部 和田 英二

韓国知識経済部と釜山広域市共催による「地域エコイノベーション事業」が2007年から5年間の計画で進められています。本事業の目的は、釜山広域市内中小企業へのクリーナープロダクション(CP)取り組みを普及させ、環境の改善とコスト削減を目指すものであり、2009年度は図-1に示すような組織体制で推進されています。この中でKITAは海外CP導入を支援する「専門委員」として事業参画を要請されたものです。

11月26～27日には総勢26名の研修団をKITAに迎えての“日本研修”を開催しました。初日にはCP取り組みのキーポイント及び取り組み事例を講義により紹介、2日目には(株)三井スタンピング及びTOTOエンブラ(株)を見学し、日本企業におけるCPの取り組

み事例を直接体得する研修をしましたが、参加者一同大変熱心に研修を終え帰国しました。

本年3月には、今度はKITAより釜山広域市内参加企業数社を訪問し、CP取り組みの指導を行う計画としています。

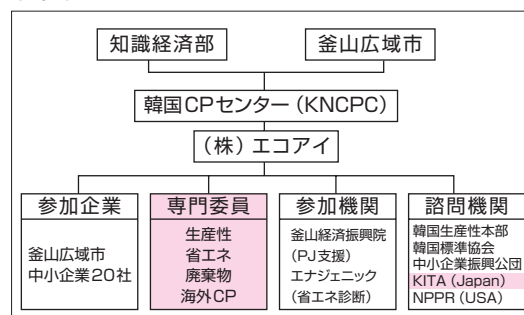


図-1 釜山広域市 地域エコイノベーション事業推進体制

KITA人事異動 (2009年7月1日～12月31日)

新任

事務局事務課長を兼務(事務局調整課長)…………… 原田多賀志 (8月 1日付)
 事務局…………… 松岡 弥生 (9月 1日付)
 コースリーダー(下水道維持管理システムと排水処理技術)…………… 永峰 勉 (10月 1日付)
 KITA環境協力センター 環境専門員…………… 柳田ひろ子 (10月 1日付)

退任

事務局事務課長(退職)…………… 江藤 郁子 (7月31日付)

北九州メンテナンス技術研究会 (KME) 平成21年度 総会・講演会開催

KITA生産性協力センター 関 義明

北九州メンテナンス技術研究会 (KME) の平成21年度総会・講演会は、7月16日 (木) に小倉駅北口のAIM (アジア太平洋インポートマート) 8階大ホールで行われました。

総会では、「平成20年度事業報告及び平成21年度事業計画」が審議され、事務局原案通り承認されました。

総会終了後3人の講師による講演会が行われ、会員会社の役員、管理職、技術者他77人が出席し、盛会裡に終了しました。演題及び講師は次の通りです。

- ①「最新の電力設備の保全技術」
九州工業大学大学院
工学研究院電気エネルギー部門 教授 匹田 政幸氏
- ②「環境モデル都市の全体構想と企業の関わりについて」
北九州市環境局環境政策部
環境モデル都市担当課長 櫃本 礼二氏
- ③「発展途上国に適した日本の廃棄物処理技術
～生ごみコンポストを例にして～」
株式会社ジェイベック 若松環境研究所
所長代理 高倉 弘二氏

今回の講演は、九州工業大学の匹田教授から電力設備の絶縁材料の劣化や絶縁破壊についてのメカニズム

や保全技術についてご講演をいただきました。また、北九州市が環境モデル都市に認定されたこともあり、市役所の櫃本課長から環境モデル都市構想への北九州市の取り組みについてのご講演と、具体的な環境問題への取り組み事例として廃棄物処理技術の一例について (株) ジェイベックの高倉所長代理からご講演いただきました。

現在、当技術研究会 (KME) では新規会員の募集をしています。廉価な年会費と受講料にて上記総会・講演会の他年8回の設備保全技術セミナーや年6回の予知保全研究会へ参加していただけます。入会を希望される企業・団体・個人はKITAの窓口 (担当 関) にご連絡ください。



KME総会・講演会風景

「KMEセミナー」平成21年度受講実績 (平成21年12月末現在)

	セミナー名	講師	実施月日	受講実績	
				会社数	受講者数
①	疲労・強度	(有) 浦島テクノサービス 代表取締役 佐賀大学 名誉教授 浦島 親行氏 西田 新一氏	5月14、15日 5月21、22日	9社	15名
②	腐食・防食	久留米工業高専 准教授 日鉄環境エンジニアリング(株) 部長 (株) 材料・環境研究所 代表取締役 田中 慎一氏 井上 政春氏 長野 博夫氏	6月11日 6月17日 6月18日	12社	16名
③	溶接技術	九州工業大学 名誉教授 九州工業大学大学院 客員教授 加藤 光昭氏 安西 敏雄氏	7月22日 7月23日	15社	22名
④	トライボロジー (摩擦、磨耗、潤滑)	早稲田大学大学院 教授 松本 将氏	9月3、4日	9社	11名
⑤	モータ・インバータ 制御技術	(株) 安川電機 (モータ制御) 同上 (インバータ制御) 久恒 正希氏 松本 和久氏	9月15日 9月16日	8社	11名
⑥	初歩の油圧技術	ボッシュ・レックスロス(株) 営業統括部 課長 善如寺 誠氏	11月5、6日	13社	26名
⑦	工場内情報 ネットワーク 構築技術	早稲田大学大学院 教授 早稲田大学大学院 教授 早稲田大学大学院 准教授 李 義頡氏 吉江 修氏 立野 繁之氏	12月7日	中止	
⑧	設備診断技術	日本診断工学研究所 代表研究者 豊田 利夫氏	平成22年 1月27、28日	募集中	
合 計 (平成21年12月末現在)				66社	101名

『“フルサ サイダー”（初めまして）』

ホストファミリー 小川 浩（福岡県遠賀郡遠賀町在住）

これはJICA九州の九州国際センターロビーで、研修員と初対面のとき、少々緊張気味にアラビア語であいさつを交わしている場面です。ホストファミリー活動には14年前の1996年から参加していますが、今までに約30カ国の研修員を受け入れました。研修員の母国語で自己紹介するように努めています。

訪問受け入れの準備は、まず私が図書館で研修員の国の全般的な情報収集から始めます。コピーした資料を家族と一緒に読み、予備知識を得ます。この段階で研修員の国についていろいろと想像を巡らしていく内に、受け入れの楽しみが増してきます。研修員に特に伝えたい今の日本の姿については、日ごろから新聞などに掲載のカラー写真と記事をスクラップして活用しています。例えば、富士山の初冠雪や祭りの写真などです。

食事担当の妻にとっては、研修員の皆さんの「おいしい」という日本語の一言が何よりの喜びです。

受け入れ当日は、遠賀町の我が家に着くまで2～3時間をかけて、主に名所、歴史資料館、神社、お寺、図書館、漁港、海岸などを案内しています。

研修員の様々な話しの中でも、特に風土、習慣、教育、家族の在り方についての日本との相違点には最も興味を惹かれます。

研修員との交流を通じて、「地球は一つ」という感じを強く持ちます。また、マスメディアが報道する研修員の国の状況には、特に注目するようになりました。

研修員の受け入れが、少しでも研修員の心の安らぎと日本理解の一助になればと願っています。



遠賀町での「観月コンサート」を楽しんだ後、我が家でくつろぐモーリシャス国の研修員



娘の三味線にチャレンジするニカラグア国の研修員（ギタリスト）

『ホームビジット徒然』

ホストファミリー／価値創造経営研究所代表 三木 義男（福岡県行橋市在住）

今、私の横には2冊の大判写真アルバムがあり、19年間のホストファミリー活動の思い出で満たされています。それは、同時に我が家の軌跡でもあり、アルバムを捲りながら時の流れに浸っています。

今までに我が家のホームビジット（以下HV）には、42カ国、132名の研修員が来られました。メキシコ、タイ、フィリピンの方が多く、特徴としては、女性が多く、日本着物の着付けです。そして、行橋は、自然と歴史の街なので今川の桜・菜の花・コスモスや豊前国分寺、八景山などを案内しています。

アルバムから様々な思い出が脳裏に浮かんできますが、その2、3例を紹介します。まず、メキシコのモンテレイ工科大学のエクトル教授と知り合い、互いに訪問し合ったことです。エクトル教授夫妻が日本への新婚旅行で我が家に泊まり、その後、我々がメキシコに行ってお世話になりました。

次は、私がガーナの講座のコースリーダーとなり、事前調査で現地に行き、我が家にHVした研修員に再会したことです。HV時は、国家公務員でしたが、その時は、国会議員になっていました。

それから、写真アルバムの皆さん全員が、日本の着物を着て本当に喜んでいる姿です。その皆さんが、日本で元気になっているか、我が家でHVした研修員の国名が海外ニュースに出るたびに思う今日、この頃です。

HVをトリガーとして、世界の様々な動きに興味を持つことは、人生の良い勉強になります。今後とも、日本文化を知っていただき、その人の輪の広がりによって、世界平和に少しでも貢献するためにHVを継続していきたいと思っています。最後に、このような出会いの場を企画していただいているKITA事務局に感謝いたします。



着物を着て喜ぶチリ国の研修員

JICA九州20周年記念式典において研修協力団体表彰される

KITAコースリーダー 川崎 淳司

昨年10月30日、JICA九州主催により、九州国際センター（KIC）開設20周年の記念式典が同センターで執り行われました。

式典は、JICA本部、JICE本部、福岡県、北九州市及びKITAをはじめとする受託機関など研修関係者約70人の出席のもとで盛大に行われました。

この式典では、JICA研修に大きく貢献された団体や支援に注力された個人の方々に対し、九州国際センターの小林正博所長から平成21年度の感謝状が贈呈されました。

KITAは2009年度、JICA九州から46コースの研修受託を請け、当地域の200を越える産学官や各団体のご協力を得て研修事業を進めています。その中でこの厳しい経済状況にも関わらず、長年、ご協力いただいている団体を推薦し、受賞対象団体をJICA九州で選考していただきました。今回、表彰された団体は、石川金属工業（株）、（株）

刈野、喜楽鋳業（株）、光和精鋳（株）、（株）昭和電気研究所、（株）戸畑ターレット工作所、日鉄環境エンジニアリング（株）、箱崎ユーティリティ（株）、富士岐興産（株）、松本工業（株）の10社です。また、同時に6つの団体と個人4名も表彰を受けました。

式典終了後、祝賀パーティが催されましたが、このパーティでは、現在来日中の研修員も参加し、約200人の多くの人が共に20周年を祝いました。



祝辞を述べる河野KITA理事長

国際研修に関する講義・講演会（廣野塾）開催

～高校生や国際協力関係者と交流～

KITA環境協力センター 村上 能崇

KITA環境協力センターは、昨年8月の2日間、国際機関などで要職を歴任され、現も環境分野の政府顧問などで活躍中の廣野良吉先生（成蹊大学名誉教授、KITA参与）を講師に迎え、国際研修に関する講義と講演会（廣野塾）を実施し、先生と参加者との活発な意見交換を行い、交流を図りました。

第1日目の小倉高等学校の講義では、文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業の一環として実施しました。廣野先生の実見したグリーンランドにおける地球温暖化の深刻さ及び国際的に低炭素社会をめざすことの重要性について話していただきました。

また、第2日目の国際協力関係者への講演では、クリーナープロダクションやクールアース構想を通じた持続可能な発展の促進について、最新のデータを使って、わかりやすく解説していただきました。今後とも、国際協力の人材育成と研鑽に努めてまいります。



福岡県立小倉高等学校1年生への講義風景

「エコスタイルタウン2009」出展 市民と交流

KITA環境協力センター 村上 能崇

環境活動に取り組む北九州の市民団体・NPO・企業などが集結し、日頃実践している日常生活に密着した地球温暖化防止につながるエコライフを提案するイベント「北九州エコスタイル2009」（10月17～18日に北九州市で開催）に出展しました。

KITAの業務をパネルやクイズで紹介するとともに、2001年度から3カ年にわたり技術協力移転したインドネシアの豆腐工場の廃水処理について簡易なデモ用水質浄化装置を使って説明しました。多くの市民の皆さんが参加し、ブースは大盛況でした。中には熱心に活動内容を質問する方もおられ、環境国際協力に対する関心の高さを感じました。



ペットボトルで作った簡易なデモ用水質浄化装置を使い廃水処理を説明

KITAニュース No.33 (第33号)

2010年1月1日発行 (1月・7月発行)

発行：財団法人北九州国際技術協力協会

編集発行人：事務局長 藤原 直捷

〒805-0062 北九州市八幡東区平野一丁目1番1号 国際村交流センター4階

TEL：093-662-7171

FAX：093-662-7177

E-mail：info@kita.or.jp

KITA

検索

カチッ!

Web site：http://www.kita.or.jp/

●Web site (KITAホームページ) では、KITAのご案内、活動、過去のKITAニュースなどを掲載していますのでご覧下さい。